

瀬は淵と思ひかはさば大井川人の心のそこもたのまじ

〔扶桑拾葉集二十八〕あづまの道の記

藤原光廣

廿五日、かなやをたつ、みな人、日のかさなるま、につかれつゝ、朝居してたつことおそし、大井河をかちにて渡りて見んとてわたる、大なる石かぎりなく流て、足の踏どなし、河ごしといふ者つかずしては、一步も成がたし瀬は三有、是も時によりてかはる也、歌枕などにも入て名所なれば、目もとまりぬ、河原遙に行て思ひよりけり、

君が代の數に取とも大井河河原におほき石はつきめや

〔丙辰紀行〕大井川

大堰河は、駿河と遠江との境なり、明日香川ならねど、霖雨ふれば淵瀬かはる事たびくなれば、東の山の岸を流れて、島田の驛、河原の中にある事もあり、西のかたに流れて、金谷の山にそふ事もあり、一すぢの大河となりて、大木沙石をながす事もあり、あまたの枝流となりて、一里ばかりが間にわかる、事もあり、さればいにしへより、徒杠輿梁もなりがたきゆへに、往來の人馬、川の瀬をしらざれば、金谷に待もあり、島田にとゞまるもあり、わたりかゝりておぼる、者もあり、辛ふじてむかひの岸にいたるものあり、島田の民、をのが家はたゞよひ流れるれども、旅客の囊をむさぼるゆへに、洪水をよろこぶ、賣炭翁が單衣にして、年の寒きを待がごとし。○中略

尋常揚厲必過腰、叱馬呼奴魂欲銷、來往就中何處苦、無舟無筏復無橋、

〔東海道名所記三〕島田より金谷へ一里

男申けるは、いざやこゝにとまり侍べらんといふ、樂阿彌申すやう、旅なれぬといふは此事なるべし、此さきに大堰川あり、駿河と遠江の境なり。○中略近比は島田と金谷の馬かた川ごしと一味して、あさき瀬をかくし、ふかき所をとをり、わざとふしまろびなんどして、腰につくほどの水に